

2021 年度大学卒業式 式辞

学長 湯口 隆司

本日は卒業おめでとうございます。今回はオンラインで配信を行い保護者の方々にはそれを見ていただくことになりました。

さて活水学院の「建学の精神」と教育の目標は自らを律し、自ら立つ、つまり「自立した職業人」を育てることです。この二つの意味での自立／自律は活水学院創立以来の活水教育の最終的な目標でした。

個人だけでなく国家の「自律、そして自立」が決して容易に実現できないことを、ロシアによるウクライナ侵攻で、私たちは痛みをもって今感じています。

この不安は日常で使う「ことば」そのものにもあります。自己正当化、バイアスがかかった言い方と聞き方。話す方も聞く側も、ことばに重きを置けない現実があります。

人は大地を汚し、動物や植物の生態系を壊し、イマジナリーラインである国境線を引き、戦争を起こし、互いに傷つけてきました。少数の声が耳に入らない世界は「ディストピア」です。「持続可能な開発目標」(SDGs)が目指すことは、「自立」のみを求める世界から、隣人である「他立」を尊重する世界に変えようとする 것입니다。

自分だけの「ことば」から解放されたときに聞こえる隣人の声がそこにあります。ある詩人は、「国境を越えることば」は単に別の国の国語を学ぶことではなく、概念が共有できることばだと言います。自由、権利、悲しみ、喜び、愛、音楽、そして「祈り」もそうです。ですからウクライナの人々のことばと祈りは国境を越えて共有できています。

週に 2 回、朝 8 時半から大チャペルで「朝の礼拝」があります。自由参加の小さな会ですが、私は活水にとって大きな意味がある時間であると思います。汗滴る夏も、凍える冬の朝もコロナ禍の中で学生が一人もいない時にも、オルガンが奏でられ、時には奨励者と数人だけで、聖書を読み、讃美歌を歌い、祈りを共にしました。寒い冬はコートを着込んでも長い 15 分間でした。「朝の礼拝」は祈りです。学院の教育が守られ、学生や教職員の健康が守られること、時には国の為政者が正しい道を歩むようにと祈ることもありました。

武力や暴力の前に、少数人の集まりや「祈り」が何の役に立つのでしょうか。私はこう考えます。私たちは報いがあるから愛するのですか。そうではありません。「祈り」もそうです。他の人と共に分かち合うのがいのちだからこそ人は祈るのです。「活水は祈りの子です」という創立者のことばを思い起こしたいと思います。

サマリアの女は、他人の苦しみや喜びを我がこととして、水を分かち合える女性となりました。「祈り」は力があります。友人や家族、そして活水で学ぶ学生や教職員のこともこれからの祈りに覚えてほしいと願います。

このことを心に刻み、それぞれの一步を、そして市民の一人として自覚を持ち歩み出していただきたいと思います。